

現場に馴染むN I Eを目指して

長野県新聞活用教育推進協議会会長
信州大学教育学部教授
澁澤 文隆



“わかる ひろがる つながるN I E”をメインテーマにしてのN I E全国大会長野大会がいよいよ目前に迫ってきました。長野大会はN I Eの最先端をいくような大会にはなりません。しかし、N I Eの原点に立ち、改めてN I Eの特質を踏まえ、今日の学校教育に馴染むようにN I Eを展開していくための方向性を提示するという点では、前向きで建設的な提案ができる大会になるものと思っています。

長野県では、N I Eは一部の先生方の実践にとどまっています。その点を素直に直視し、どうすれば普及・拡大を図ることができるのか、この問いかけから長野県の取り組みはスタートしました。なかなか普及しない背景には大きく二つあります。一つは、先生自身が新聞を読んでいなかったり、新聞に慣れ親しんでいないということです。他の一つは、大人用の新聞を教材としてそのまま教室に持ち込むことに抵抗感があり、納得できないということです。

多忙な毎日で家に帰れば疲労でぐったり、なかなか新聞を読む時間も、新聞を開く気力も出てこない。学校の職員室に新聞が置かれていても、多忙で読む時間などないし、たとえあったとしても新聞を読んだりしていれば暇そうに思われたりするから手に取ることができない。読んでいなければN I Eなどに関心が持てるはずがありません。ましてや、今、現役の先生方はテレビが各家庭に普及した時代に育ち、テレビは見るが新聞は読まないといった環境下で子ども時代を過ごしている先生が大部分です。また、高校進学率が高まり、受験生の学習負担の軽減化が要請される中で、入試問題の出題の範囲が教科書に限定されるようになっていった時代（換言すれば学校の勉強がイコールテスト、入試のためにやるといった位置付けになり、授業で取り扱う教材は教科書の記述内容にかかわりのあるものに限定するようになっていった時代）に育った先生が多く見られます。このため、子どもの時代から新聞にはあまり親しんでこなかった恐れがあります。

一方、生徒の目の高さによって教材を開発することは、分かる授業づくりの基礎基本です。このため、先生方は日頃から子どもの言動などを通して学力や関心などを把握し、子どもにとって等身大の教材開発に努力し、それを誇りにしている先生方が多く見られます。そうした先生方から見ると、大人を目線で編集されているものを、ダイレクトに教室に持ち込むことは、教材開発の基礎基本を忘れた行為であり、到底支持できるものではありません。

長野県のN I E推進協議会は、そうした先生方を対象にしてN I Eの実践を呼びかけていることとなります。この壁は厚く、小手先の工夫ではなかなか打破することができません。しかし、一方で、生きて働く力をはぐくんだり、社会の動向に関心をもったり、心豊かに生きる知恵を学んだり身につけたりするためには、受験勉強だけにこだわっているわけにはいきません。新聞のような学校の勉強と実際の社会、生活を関連づけることができるようなものを有効活用する必要があります。新聞の各紙面にはたくさんの文字情報が入っており、写真やイラストなども掲載されています。単に記事の内容だけにこだわらず、広告や写真なども含めてさまざまな目で見てみると、そこにはさまざまな教材になり得る可能性をもった内容がちりばめられており、教材の宝庫であることが見えてきます。それは、これまでの実践校の取り組みが実証してくれています。

以上のように、長野県の大会準備は、原点からスタートし、抵抗感に立脚し、それを乗り越える方向で実践した成果を発表することとしています。その際に、これまでの実践校の研究成果が大いに役立ちました。各実践校の真摯な取り組みに敬意を表し、厚く御礼申し上げます。